

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

令和元年 6 月 5 日

所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	横山 実玖歩

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
宮崎県串間市、幸島
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
生態学野外実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成31年4月21日 ~ 平成31年4月27日 (7日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学野生動物研究センター幸島観察所、技術職員、鈴木 崇文氏
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回の実習は、幸島に生息するニホンザルを対象に各自設定したテーマで調査をおこない、その結果を発表することを通して、霊長類の野外調査の基礎を学ぶことを目的としておこなわれた。
スケジュールは以下の通りである。
4/21 移動、オリエンテーション 4/22 予備観察、研究計画の作成 4/23 調査、データ分析 4/24 データ分析 4/25 都井岬での半野生ウマの観察 4/26 プレゼンテーション準備、発表 4/27 清掃、移動
ヒト以外の動物が文化を持つことを発見した地、幸島を訪れることを心待ちにしていた。今まで授業などで度々幸島に住むサルのお話を聞いていたが、今回の実習で初めて実際に彼らの姿を目にすることができた。島に降り立つと、ボートの音を聞いたサルたちが砂浜に集まってきた。彼らは鈴木氏の姿を見分け、餌をねだるフードコールを繰り返しており、給餌のシステムを学習し、心待ちにしているようだった。栄養の観点から現在は主にムギを給餌しているためにイモ洗い行動を見ることはできなかったが、学生の一人が実験で使用していた寒天を海水で洗って食べる行動を見ることができた。ものが違って柔軟に行動をさせていく姿に彼らの高い適応力を感じた。採食中、餌を取り合って喧嘩が起こった際には、威嚇する個体、怒られて悲鳴を上げる個体の他に、劣勢な個体の援助に行く個体や喧嘩後にグルーミングをしてあげる個体があり、彼らは複雑な個体間関係を築いているように感じた。採食後は各々がペアを作ってグルーミングをおこないリラックスした表情を見せていた。長時間観察を続けることで、彼らの様々な行動を観察することができ、彼らの高度な認知や社会性の一端をうかがい知ることができた。
本実習中、ニホンザルの採食戦略に関する実験をおこなった。幸島のサルは、手と口を使用して採食をおこなうことが知られている。ムギと、ムギと同じ大きさに砕いたピーナッツを使用し、食物の栄養価の違いが採食方法に与える影響を検討した。実験の結果、食物によって採食方法に違いがあることが明らかになった。ピーナッツを採食するときは、ムギを食べる時よりも手を使用して食べる割合が高かった。さらに周囲への警戒行動であるビジランスの頻度が上がった。この採食方法は速度の観点から見れば最適ではなかったが、彼らがピーナッツの価値の高さを理解し、周囲の他個体との競争に備えて採食方法を変化させていたことが示唆される。今回、自分の視野を広げるためにあえて自分の専攻とは異なる分野のテーマを選んだ。そのため分からないことも多く、自分の知りたいことが結果として現れるように実験デザインを考えることに苦労した。実験計画からデータ分析に至るまで、鈴木氏や同行者の辻先生、田中先生が懇切丁寧に指導して下さったおかげで自分の納得のいくものに仕上げることができた。限られた時間の中で、研究の一連の流れを実際に経験したことは大変勉強になった。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

25日には悪天候のため幸島に行くかわりに、都井岬で半野生である御崎馬を観察した。車でステーションから岬に向かう途中にも何頭ものウマを目撃したが、特に人や車を恐れることなく道路を歩いており驚いた。ビジターセンターではキュレーターの方から興味深いお話を聞いた。ウマはハーレムを作って、オスをリーダーとした高度な社会を構成しており、岬に設置してある水場の順番を譲り合うなどの向社会性を示す行動が見られるようだ。また訪れたのがちょうど出産のシーズンであり、生後1カ月に満たないコドモと母親を間近で観察することができた。観察中、2組の親子に遭遇したが、コドモへの接し方(コドモが離れることへの寛容さ)が大きく異なっていたのが印象に残った。それぞれの性格なのか、それまでの子育て経験の有無なのか、なにかほかに理由があるのだろうか。また世界的にも貴重な半野生ウマを保護するために、御崎馬以外の種のウマの繁殖を規制したり、年に1回馬追いをおこなって寄生虫の駆除や個体識別の焼き印入れをおこなったりと継続的な活動が続けられていることを知った。生息地を人がすむエリアと分離し、定期的な管理をおこなっていくことが彼らの保全に重要であると学んだ。

幸島フィールドセンターでは参加者全員で共同生活をおこなった。出会って1ヶ月に満たない仲間と生活することを初めは不安に思っていたが、みんなで協力して炊事をおこない、助け合ってプレゼンの準備を進めるうちに仲を深めることができた。魚釣り、シメサバづくり、岩にくっついた牡蠣の採取など初めての経験をし、観察以外でも充実した時間を過ごすことができた。

本実習では自分の知りたいことを数値化する実験デザインの方法や得られた結果のまとめ方を学んだ。これらの技術は今後の自分の研究をおこなう上で大いに役立つと考えられる。また「野生」というものはヒトの手が一切加わっていないことを意味するのではなく、野生動物の保全には人による生息地の保護や各個体の健康管理などが不可欠であることを知った。新しく得た視点を活かして今後も野生動物とヒトの関わり方について学んでいきたい。



本土からみた幸島



幸島で実施した実験の様子
エリア内に撒いた食物の採食方法を観察・記録した。



実験に使用した寒天を海水で洗って採食しているサル



グルーミングをおこなうニホンザル
リラックスした表情を浮かべていた。



木の枝に乗って体を揺らすコドモ
遊んでいるように見えた。



撮影するヒトを見つめる親子

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



地面に倒れ込んで眠る御崎馬の
コドモ
このような体制で寝るのはコド
モの間だけだという。



授乳をおこなう御崎馬の親子
コドモは生後3週間ほど。



岩からはがした牡蠣
ほどよい塩味がしてとてもおい
しかった。

6. その他 (特記事項など)

本実習へは PWS の支援を受けて参加することができました。鈴木崇文氏、霊長類研究所の辻大和先生、田中洋之先生には大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。